

令和元年6月21日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02781

研究課題名(和文) 投射構文の歴史的発達と構文化について - 英語史からの実証研究 -

研究課題名(英文) Diachronic aspects of projector constructions in English: Empirical studies from the perspective of constructionalization

研究代表者

柴崎 礼士郎 (Shibasaki, Reijirou)

明治大学・総合数理学部・専任教授

研究者番号：50412854

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本申請課題は、英語史における「投射構文」(projector constructions)の発達を「構文化」(constructionalization)という理論的枠組みから考察するものである。各構文事例の発生から現代に至るまでの変化のプロセスを包括的に調査し、構文化と構文文法と談話研究の有意義な融合をデータとともに例証する。日本語との対照研究も実施し、考察の妥当性も検証する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本科学研究費助成に基づく研究成果として、以下の2点を取り上げたい。学術的には、国際学会での研究発表を通して、国際的に主要な出版社からの論文刊行を目指した。結果として、多数の研究者との交流が可能となり、国内外で数回の招待講演の機会を得ることができた。一流の研究者との直接の意見交換を経て、研究手法と研究成果の提示の仕方が妥当であることも確認できた。社会的には、国民の税金に基づく研究であることを強く意識する好機となった。本研究が言語の使用実態に基づく研究であることから、現在のコミュニケーションに力点を置く語学教育へ、言語学の立場から貢献できたものと判断している。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to investigate projector constructions and related phenomena in the history of English from the perspective of constructionalization. The project members address the way each construction emerges and develops over time, exploring the discourse-pragmatic and functional basis of constructionalization. A contrastive study of English and Japanese serves to assess the appropriateness of the constructionalization approach to language change.

研究分野：英語学

キーワード：破格構文 英語史 対照言語学 談話分析 語用論標識 構文化 文法化 統語論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、命題の前後に創発する表現群の研究が盛んであり、そうした発話者のインタラクションが顕著に現れる談話上の位置を「(発話の)周辺部」とする用語も固まりつつある。こうした研究動向の中で申請者が取り組んできたものは、the fact is (that), the point is (that), the problem is (that)等の周辺表現であった。つまり、先行情報と関連・対立する内容を導入することに特化した構文である。これらの構文事例は「貝殻名詞構文」(shell noun constructions; Schmid 2000)あるいは「投射構文」(projector constructions; Hopper & Thompson 2008)として知られる構文の一部である。先行研究では、特に現代語における詳細な分析が報告されている一方、歴史的発達経緯を報告するものは皆無に等しかった。そこで、申請者は上掲構文の通時的発達をコーパスと文献資料を用いて調査し、構文理論と文法化理論の点から分析する計画を立てた。

2. 研究の目的

本申請課題は、英語史における「投射構文」(projector constructions)の発達を「構文化」(constructionalization)という理論的枠組みから考察するものである。投射構文には命題の直前に使用される the fact is (that)「本当は、実は」等があり、先行情報を受けつつ関連・対立する内容を導入する談話機能を果たしている。本課題では投射構文を広義に解釈し、同様の談話機能を有する譲歩節、理由節および副詞連結詞を投射構文の一部と捉える。各構文事例の発生・発達から現代に至るまでの変化のプロセスを包括的に調査し、構文文法の最新理論である構文化の実証研究として提示する。談話・コミュニケーション分析は構文文法の最も弱い部分であるが、投射構文の歴史的考察を通して、構文文法と談話研究の有意な融合をデータとともに例証する。

3. 研究の方法

本申請課題は、複数の大規模コーパスおよび原典テキストに基づく、構文化理論の実証研究である。研究組織構成員共通の立脚点である歴史言語学と、構成員が各々培ってきたコーパスに基づく研究方法の融合を目指す。研究組織構成員の間では、研究成果の質を高める最も効果的な方法は、同分野で活躍する研究者との直接の対話であるとの見解に至っている。最先端の研究に従事する研究者との直接の意見交換を重要視し、国際学会での研究発表を継続的に行う計画である。結果として、研究組織構成員全体の研究水準の向上に繋がり、研究計画最終年度へ向けて研究成果の完成度を高めることができるからである。

4. 研究成果

特定の表現群が統語的に独立して文頭や文末に生起する談話/語用論標識との関係で注目を浴びているものの、談話中に連鎖する節や文が、使用頻度を高めながら融合するという逆のプロセスは注視されていない。しかし、英語史には節や文が融合する破格構文が多数確認でき(e.g. that's what he said is that..., that's the thing is)。構文化理論は様々な言語変化のプロセスが説明可能なことから学術的な相性は非常に良く、理論的貢献が見込まれる。本研究組織構成員は、現時点では最大限に精緻化されていない構文化理論のこうした側面に注目し、関連事例を実証的に研究してきた。結果として、国内外の一流の研究者から声を掛けてもらえる機会が年々増加し、論集やワークショップへ申請者が招かれることも少なくなかった。

海外では共同研究が盛んである。データや研究内容の相互チェックを通して精度を上げ、分業による作業の効率化を実現している背景があるが、本研究はこうした研究動向に則る国際共同研究であった。ところが、当初のメンバーであった Alexander Haselow 氏(独ロストック大学)が、体調不良により初年度に不参加となった。しかし、Dániel Z. Kádár 氏(英ハダースフィールド大学)、Sylvie Hancil 氏(仏ルーアン大学)、Seongha Rhee 氏(韓国外国語大学)の協力の下で、当初の計画以上の国際共同研究が実現した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 24 件)

- (1) SHIBASAKI, Reijirou. "Review: Morphosyntactic Change: A Comparative Study of Particles and Prefixes (Cambridge UP, 2012)," *English Linguistics* (The English Linguistic Society of Japan), 査読有, volume 3, issue 2, 2017, pp.591-603.
- (2) エリザベス・クロス・トラウゴット(柴崎礼土郎・訳)「「節周辺」と同領域に生起する語用論標識の構文的考察」, 小野寺典子(編)『発話のはじめと終わり 語用論的調整のなされる場所』(ひつじ書房), 査読有, pp. 75-97, 2017年3月16日.
- (3) 柴崎礼土郎. 「Wh 分裂文と進行形の歴史的発達と融合について 情報連鎖の再構築と対人

- 関係機能」, 中山俊秀・大谷直輝(編)『認知言語学と談話機能言語学の接点: 経験基盤の言語学の構築に向けて』(ひつじ書房), 査読無, 該当頁未定, 2019年刊行予定。
- (4) SHIBASAKI, Reijirou. “From the inside to the outside of the sentence: Forming a larger discourse unit with *jijitsu* ‘fact’ in Japanese,” Sylvie Hancil, Tine Breban and Jose Vicente Lozano (eds.), *New Trends in Grammaticalization and Language Change* (John Benjamins), 査読有, pp.333-360, 2018. DOI: <https://doi.org/10.1075/slcs.202>.
- (5) SHIBASAKI, Reijirou. “Sequentiality and the emergence of new constructions: That’s the bottom line is (that) in American English,” Hubert Cuyckens, Hendrik De Smet, Leisbet Heyvaert, and Charlotte Maekelberghe (eds.), *Explorations in English Historical Syntax* (John Benjamins), 査読有, pp.283-306, 2018, DOI: <https://doi.org/10.1075/slcs.198>.
- (6) 柴崎礼太郎. 「談話構造の拡張と構文化について 近現代日本語の「事実」を中心に」, 加藤重広, 滝浦真人(編)『日本語語用論フォーラム 2』(ひつじ書房), 査読有, pp.107-133, 2017年12月12日, ISBN-13: 978-4894768789
- (7) 柴崎礼太郎. 「アメリカ英語における破格構文 - 節の周辺部に注目して - 」, 天野みどり・早瀬尚子(編)『構文の意味と拡がり』(くろしお出版), 査読有, pp.201-221, 2017年11月15日, ISBN: 9784874247440 C3080.
- (8) 高橋圭子・東泉裕子. 「名詞「結果」の用法の拡張 - 近代語および現代語コーパスの用例 - 」, 『社会言語科学』(社会言語科学会), 査読有, 21巻1号, pp. 255-270, 2018.
- (9) 高橋圭子・東泉裕子. 「(さ)せていただく」の許容度と依頼表現の変化 アンケート調査による年齢層の比較から」, 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第10号, 査読無, pp.45-53, 2018年7月, <http://academicjapanese.jp/ajj02.html>.
- (10) HIGASHIIZUMI, Yuko. “On the emergence of utterance-initial discourse-pragmatic marker: *ni-shite-mo* ‘even if, by the way’ in present-day Japanese,” *JELS* 35 (The English Linguistic Society of Japan, Papers from the Thirty-Fifth Conference November 18-19, 2017 and from the Tenth International Spring Forum April 22-23, 2017), 査読有, pp. 217-223, 2018.
- (11) HIGASHIIZUMI, Yuko. “The development of confirmation/agreement markers away from the RP in Japanese,” *Periphery – Diachronic and Cross-Linguistic Approaches: Journal of Historical Pragmatics* (Special Issue) *Journal of Historical Pragmatics*, volume 17, issue 2 (John Benjamins), 査読有, pp. 282-306, 2016, DOI: <https://doi.org/10.1075/jhp.17.2.06hig>.
- (12) 高橋圭子・東泉裕子. 「近現代語コーパスにおける『(さ)せていただく』の用法」, 『コミュニケーション文化』第12巻(跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科編), 査読無, pp. 90-105, 2018.
- (13) 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子. 「第I部 第1章 周辺部研究の基礎知識」, 小野寺典子(編)『発話のはじめと終わり - 語用論的調節のなされる場所』(ひつじ書房), 査読有, pp. 3-51, 2017年3月16日.
- (14) 東泉裕子. 「近代語における左右の周辺部表現の発達: 『太陽コーパス』に見る接続助詞「から」の用法を中心に」, 小野寺典子編『発話のはじめと終わり - 語用論的調節のなされる場所』(ひつじ書房), 査読有, pp. 119-144, 2017年3月16日.
- (15) 高橋圭子・東泉裕子. 「お/ご~される」とその周辺」, 『言語資源活用ワークショップ2017 発表論文集(Proceedings of Language Resources Workshop 2)』, 国立国語研究所コーパス開発センター, 査読無, pp. 123-132, 2017, <http://doi.org/10.15084/00001513>.
- (16) SHIBASAKI, Reijirou. “On the rise of *douride* ‘no wonder’ as a projector and the reformulation of discourse sequential relations in Japanese,” Shin Fukuda, Mary Shin Kim and Mee-Jeong Park (eds.), *Japanese/Korean Linguistics, Volume 25* (CSLI Publications & SLA), 査読無, pp.383-395, 2019, ISBN: 9781684000418.
- (17) SHIBASAKI, Reijirou. “From a clause-combining conjunction to a sentence-initial adverbial connector in the history of Japanese: With special attention to *totan(-ni)* ‘at the moment’,” *Japanese/Korean Linguistics, Volume 26* (CSLI Publications & SLA), 査読無, in preparation.
- (18) 柴崎礼太郎. 「句読法から語用論標識へ Periodの談話機能の発達と今後のアメリカ英語について」, 西村義樹・鈴木亨・住吉誠(編)『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』(開拓社), 査読有, 該当頁未定, 2019年9月刊行予定.
- (19) 柴崎礼太郎. 「句読法の歴史的変化に見る動的語用論の可能性 - イギリス英語のfull stopを中心に - 」, 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝(編)『動的語用論の構築へ向けて』(開拓社), 査読有, 該当頁未定, 2020年刊行予定.
- (20) 柴崎礼太郎. 「監訳者解説」, Joan Bybee著, 小川芳樹・柴崎礼太郎(監訳)『言語はどのように変化するのか』(開拓社), 査読無, pp.400-415, 2019年6月刊行予定.
- (21) 柴崎礼太郎・小笠原清香. 「第8章: 統語変化 - 構文の発達と変化」, 小川芳樹・柴崎礼太郎(監訳)『言語はどのように変化するのか』(開拓社), 査読無, pp.219-259, 2019年6月刊行予定.
- (22) 柴崎礼太郎. 「アメリカ英語における年代記の変遷について イギリス英語と比較して」, 小川芳樹・長野明子・菊地朗(編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2』(開拓社), 査読有, 該当頁未定, 2019年刊行予定.
- (23) 高橋圭子・東泉裕子・佐藤万里. 「『了解』は使わないように」「了解です!」, 『言語資源活用ワークショップ発表論文集』第3巻(国立国語研究所), 査読有, pp. 57-67, 2018.

- (24) HIGASHIIZUMI, Yuko. "Review article: Laurel J. Brinton (2017) *The Evolution of Pragmatic Markers in English: Pathways of Change*. Cambridge University Press," 『近代英語研究』(近代英語協会)第35巻, 査読有, 該当頁未定, 2019年6月刊行予定.

[学会発表](計 29 件)

- (1) SHIBASAKI, Reijirou. "All the way to adverbs from nominal predicates: Forming a larger discourse unit with *jijitsu* 'fact' in Japanese," *The Second International Conference on Grammaticalization Theory and Data (Gramm2)*, Rouen, France, 25-27 April 2016.
- (2) 柴崎礼士郎. 「アメリカ英語における文末引用構文の発達について」, 「内省判断では得られない言語変化・変異の事実と言語理論」(東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第3回ワークショップ), 2016年9月7-8日.
- (3) SHIBASAKI, Reijirou. "Look, I'm just saying I'm undecided, is all": The emergence of a sentence-final quotation marker in English," Workshop: *Grammar-Discourse-Context* (by Ruth Mohlig-Falke and Kristin Bech), at *The 4th Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE-4)*, Poznan, Poland, 18-21 September 2016.
- (4) SHIBASAKI, Reijirou. "On the rate of language change at the edge of clause: English WH-cleft constructions at left and right peripheries," *MEIJI INTERNATIONAL SYMPOSIUM: New Directions in Pragmatic Research: Synchronic and Diachronic Perspectives*, Meiji University, Japan, 20 March 2017.
- (5) 柴崎礼士郎. 「言語学概論はアクティブ・ラーニング化するのか」, 「第22回ひと・ことばフォーラム—言語(学)教育を考える」(招待講演), 東洋大学白山キャンパス, 2017年05月27日.
- (6) 東泉裕子・高橋圭子. 「和語系名詞句の用法の拡張 - 近代語および現代語コーパスの用例より」, 『Japanese Language Variation and Change Conference 2016 (JLVC2016)』, 国立国語研究所時空間変異研究系, 2016年2月13日-14日.
- (7) HIGASHIIZUMI, Yuko. "The clause-initial use of complex connectives in Japanese: The case of *da-to-shite-mo* 'even though/if'," *MEIJI INTERNATIONAL SYMPOSIUM: New Directions in Pragmatic Research: Synchronic and Diachronic Perspectives*, invited talk, 20 March 2017.
- (8) HIGASHIIZUMI, Yuko. "On the emergence of utterance-initial discourse-pragmatic marker: *ni-shite-mo* 'even if, by the way' in present-day Japanese," *The English Linguistic Society of Japan 10th International Spring Forum*, Meiji Gakuin University, Shirokane Campus, 22-23 April 2017.
- (9) SHIBASAKI, Reijirou. "Clause combining and integration at right periphery of utterance: ..., *is what I'm saying* in American English," *The 15th International Pragmatics Conference (IPrA 2017)*, Belfast, Northern Ireland, 16-21 July 2017.
- (10) SHIBASAKI, Reijirou. "A study of present progressive forms in projector constructions: With attention to wh-clefts in American English," *International Workshop on Fixed Expressions with Mental Verbs and Related Expressions*, Seikei University, Japan, 6 September 2017.
- (11) 柴崎礼士郎. 「Wh 分裂文と進行相はなぜ相性が良いのか」, 「言語変化・言語変異研究会」, 東京大学大学院総合文化研究科, 招待講演, 2017年10月26日.
- (12) 柴崎礼士郎. 「後期近代英語から現代英語にかけての定型表現と定型性の変化について」, 「シンポジウム: 英語史における定型表現」(講師兼司会: 渡辺拓人(熊本学園大学) 講師: 小塚良孝(愛知教育大学), 谷明信(兵庫教育大学), 柴崎礼士郎(明治大学)), 「日本英語学会第35回大会」, 東北大学, 2017年11月18-19日.
- (13) 柴崎礼士郎. 「投射構文としての wh 分裂文の歴史的考察 進行形の浸透は何を反映しているのか」, 「認知言語学と談話機能言語学の接点: 経験基盤の言語学の構築に向けて」研究会, 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所, 2017年12月10日.
- (14) 高橋圭子・東泉裕子. 「お/ご~される」とその周辺」, 「言語資源活用ワークショップ2017」, 国立国語研究所コーパス開発センター, 2017年9月5-6日.
- (15) HIGASHIIZUMI, Yuko. "Sequentiality and monoclausal because-clauses from Early to Late Modern English," *The 20th International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL20)*, University of Edinburgh, UK, 27-31 August 2018.
- (16) 高橋圭子・東泉裕子. 「近現代語コーパスにみる『(さ)せていただく』の用法」, 『第10回日本語実用言語学国際学会(ICPLJ10)』, 国立国語研究所, 2017年7月8-9日.
- (17) HIGASHIIZUMI, Yuko. "Sequentiality and constructionalization of discourse-pragmatic markers in modern Japanese: The case of *nimokakawarazu* 'even though'," *The 15th International Pragmatics Conference (IPrA 2017)*, Belfast, Northern Ireland, 16-21 July 2017.
- (18) OHASHI, Hiroshi. "From concession to topic shift: The case of *having said that*," *The 15th International Pragmatics Conference (IPrA 2017)*, Belfast, Northern Ireland, 16-21 July 2017.
- (19) OHASHI, Hiroshi. "Concessive constructions and the development of discourse management function: The case of *having said that*," *MEIJI INTERNATIONAL SYMPOSIUM: New Directions in Pragmatic Research: Synchronic and Diachronic Perspectives*, invited talk, 20 March 2017.
- (20) SHIBASAKI, Reijirou. "On the rise of *douride* 'no wonder' as a projector and the reformulation of

- discourse sequential relations in Japanese,” *The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK25)*, University of Hawai'i at Manoa, Honolulu, Hawai'i, 12-14 October 2017.
- (21) SHIBASAKI, Reijirou. “From a clause-combining conjunction to a sentence-initial adverbial connector in the history of Japanese: With special attention to *totan(-ni)* ‘at the moment’,” *The 26th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK26)*, UCLA, Nov 29 to Dec 1, 2018.
- (22) Madoka KAWANO, James A. ELWOOD, Yuya KOGA and Reijirou SHIBASAKI. “Learner perceptions of active learning: Some issues of poster session activities in ESP university classes,” *The 3rd International Psychology of Language Learning Conference (PLL3)*, Waseda University, 7-10 June 2018.
- (23) SHIBASAKI, Reijirou. “Flexibility of temporal nouns in Japanese: With special reference to *shunkan* ‘(at the) moment’,” *Referentiality Workshop*, University of Alberta, Edmonton, Canada, 7-9 September, 2018.
- (24) SHIBASAKI, Reijirou. “Versatility of nominal predicates and the emergence of pragmatic markers in Japanese,” *Referentiality in Asian Languages (The 2018 JK PRECONFERENCE WORKSHOP)*, UCLA, 28 November 2018. (招待講演)
- (25) SHIBASAKI, Reijirou. “From a clause-combining conjunction to a sentence-initial adverbial connector in the history of Japanese: With special attention to *totan(-ni)* ‘at the moment’,” *The 26th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK26)*, UCLA, Nov. 29 to Dec 1, 2018.
- (26) 柴崎礼士郎. 「文頭副詞「とたん(に)」に関する一考察」, 「第3回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ (GJNL-3, The third Workshop on the Grammaticalization of Japanese and Nearby Languages 3)」, 東北大学川内南キャンパス, 2018年12月8-9日.
- (27) SHIBASAKI, Reijirou. “From nominal predicates to pragmatic markers in the history of Japanese: With special reference to East Asian languages,” *International Conference on Current Trends in Linguistics (CTL)*, University of Rouen, France, March 28-29, 2019. (招待講演)
- (28) 高橋圭子・東泉裕子・佐藤万里. 「『了解』は使わないように」「了解です!」, 「言語資源活用ワークショップ2018」, 国立国語研究所, 2018年9月4日-5日.
- (29) 柴崎礼士郎. 「述部から創発する独立型表現に関する予備的研究—近現代日本語の「道理で」を事例として—」, 「話しことばの言語学 第14回ワークショップ」, 東京外国語大学 アジアアフリカ言語文化研究所, 2018年2月24日.

〔図書〕(計14件)

- (1) 小野寺典子(編)『発話のはじめと終わり—語用論的調整のなされる場所—』, ひつじ書房, 2017年3月16日, 総頁数280頁(担当頁pp.75-97), ISBN 978-4-89476-843-7.
- (2) Sylvie Hancil, Tine Breban and Jose Vincente Lozano (eds.), *New Trends in Grammaticalization and Language Change* (John Benjamins), vi-433pp (担当頁 pp.333-360), DOI: <https://doi.org/10.1075/slcs.202>.
- (3) Hubert Cuyckens, Hendrik De Smet, Leisbet Heyvaert, and Charlotte Maekelberghe (eds.), *Explorations in English Historical Syntax* (John Benjamins), viii-312 pp(担当頁 pp.283-306), 2018, DOI: <https://doi.org/10.1075/slcs.198>.
- (4) 天野みどり・早瀬尚子(編)『構文の意味と拡がり』, くろしお出版, 2017年11月15日, 総頁数247頁(担当頁 pp.201-221), ISBN: 9784874247440 C3080.
- (5) HIGASHIIZUMI, Yuko, Noriko O. Onodera, and Sung-Ock Sohn (eds.) *Periphery – Diachronic and Cross-Linguistic Approaches: Journal of Historical Pragmatics* (Special Issue), volume 17, issue 2 (John Benjamins), 2016, DOI: <https://doi.org/10.1075/jhp.17.2.06hig>.
- (6) Takuto Watanabe and Reijirou SHIBASAKI (eds.) *Formulaic language in the history of English*, Kaitakusha, in preparation.
- (7) 中山俊秀・大谷直輝(編)『認知言語学と談話機能言語学の接点: 経験基盤の言語学の構築に向けて』, ひつじ書房, 該当頁未定, 2019 刊行予定.
- (8) 小川芳樹・柴崎礼士郎(監訳)『言語はどのように変化するのか』(Bybee Joan, *Language Change*, Cambridge University Press, 2015, 全訳, 解説), 開拓社, 総頁数(担当頁 pp.219-259, 400-415), ISBN978-4-7589-2272-2 C3080.
- (9) 加藤重広・滝浦真人(編)『日本語語用論フォーラム 2』, ひつじ書房, 総頁数252頁(担当頁 pp.107-133), ISBN-13: 978-4894768789.
- (10) Shin Fukuda, Mary Shin Kim and Mee-Jeong Park (eds.), *Japanese/Korean Linguistics, Volume 25*, CSLI Publications & SLA, 総頁数ix-423pp(担当頁 pp.383-395), 2019, ISBN: 9781684000418.
- (11) *Japanese/Korean Linguistics, Volume 26*, CSLI Publications & SLA, in preparation.
- (12) 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝(編)『動的語用論の構築へ向けて』(開拓社), 総頁数未定, 2020 年刊行予定.
- (13) 西村義樹・鈴木亨・住吉誠(編)『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』(開拓社), 総頁数未定, 2019 年9月刊行予定.
- (14) 小川芳樹・長野明子・菊地朗(編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2』(開拓社), 総頁数未定, 2019 年刊行予定.

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

1. 発表要旨

(1) HIGASHIIZUMI, Yuko. “On the regular developmental path of discourse-pragmatic markers in Japanese: The case of *ageku* ‘finally,’” *Abstract Booklet*, p. 42. Discourse-Pragmatic Variation & Change 3, Ottawa, Canada, 4–6 May 2016.

2. 国際シンポジウム:

- (1) *New Directions in Pragmatic Research*, 2017 (org. by Reijirou SHIBASAKI) (<http://www.meiji.ac.jp/cip/info/2016/6t5h7p00000mrk3h.html>)
- (2) Panel: Sequentiality and Constructionalization of Discourse-Pragmatic Markers (org. by HIGASHIIZUMI, Yuko, Noriko O. ONODERA, and Reijirou SHIBASAKI), *Abstracts*, pp. 33–34. *The 15th International Pragmatics Conference*, Belfast, Northern Ireland, 16–21 July, 2017.

3. ホームページ

(1) <https://gyoseki1.mind.meiji.ac.jp/mjuhp/KgApp?kyoinId=ymdygeyoggy>

6. 研究組織

(1) 連携研究者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究分担者氏名：大橋 浩

ローマ字氏名：OHASHI, HIROSHI

研究協力者氏名：東泉裕子

ローマ字氏名：HIGASHIIZUMI, YUKO

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。